

東京バッハ合唱団 月報

[第 548 号] 2008 年 2 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.548

February 2008

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

古典のすばらしさ

大村 恵美子

石走る 垂水の上の さわらびの
萌え出づる春に なりにけるかも

志貴皇子

このお正月休みに、小学校いらい愛誦していた万葉集を、数十年ぶりに初めて読みとおして、確認したこと、やっぱり万葉集の中で私のいちばん好きな歌は、これだったと。今は、やっと東京でも初雪が降ったほどの大寒中だが、私の誕生日（3月9日）ごろになると、この歌の気分にも近づいてくるのではないかと。心がはずんでくる。

もう一つ、2009年のドイツ演奏旅行の下見に、この8月には、同じコースを調べに出かけなければならない。今回は、シュトゥットガルトとフライブルクを結ぶ南独の地域で、バッハに直接ゆかりのあるところではないが、南吉衛（みなみ・きちえ）先生の任地であるシュトゥットガルトと、昨年松山で数日をともに過ごしたフライブルクの方々のバックグラウンドを訪問する旅なので、その中間にある、ライン河沿いのフランス領コルマル、そしてストラズブルにも立ち寄ってみたい。第1回の旅行に、この両市にも寄り、ストラズブルではコンサートもできたが、なにしろ1983年、25年も前のことなので、もうほとんどの知人も代替わりとなっていることだろう。今回はどれだけのことができるのかわからないが、連絡をとってみよう。そして、前回はせっかく行ったのに、あまりに忙しくて、ストラズブル市内も、カテドラルの内部も、何も見る事ができなかった。せめて半日くらいでも見学にあてたい。

私が留学した2年間は、大学と音楽院との往復のあいまに、アルザス一帯の広い地域を、招かれたり、遠足したり、ホンダ・カブ号を乗りまわしたりして、丹念に訪れた。その中でも、大学生ゲーテが、ういういしい交わりをフリーデリケともったゼーゼンハイム（今はフランス語でセッサンアイム）というかわいい村を思い出す。それで、また何十年ぶりに、ゲーテの『詩と真実』を読み返した。合唱団のドイツ旅行では、ライブツィヒを訪れることが多く、ファウストとメフィストフェレスを記念するアウエルバッハスケラーでも食事をしたりして、ゲーテの学生時代といえ、こちらのほうを思い起こす人が多いと思う。けれども、私にとっては、ストラズブル大学の構内に立っていた若いゲーテ像、そしてフリ

ーデリケのゼーゼンハイムに近いストラズブルが、ゲーテとの大きな接点なのだ。やっぱりゲーテの明るいおらかさは、バッハに通じる。バッハよりもアマチュア風な面、豊かに育ったお人よしなところも、許容範囲だ。

このように、新年になってから、万葉集（ピカイチの志貴皇子）、ゲーテ、そしてバッハの新しい演奏曲、と古典にかこまれて日々を過ごした。核の危険性、地球崩壊の怖れ、人間性低下の不気味さなどの脅威の迫らなかった昔の人間たち。私たちはそれらの作品を味わうことで、一気に人間としてリフレッシュできるのだ。

【2009年演奏旅行の関連記事がp.4にあります】



ストラズブル
大学構内のゲーテ像

2008年の活動予定 追加

- 3月9・10日（日・月）箱根一泊旅行 【詳細別紙】
- 6月21日 第102回定期演奏会（めぐろパーシモン）
- 6月28日（土）15：30-17：30（世田谷中央教会）
団員年次総会
- 7月7日（月）18：30-20：30（目白聖公会）
合唱団創立46周年記念懇親会（座談会、軽食）
発題「地獄と天国」上村 静氏（団友・聖書学）
【詳細は次号月報でお知らせ】
- 7月21日（月・休日）特別演奏会（世田谷中央教会）
- 8月1・2・3日 野尻湖合宿と特別演奏会（神山教会）
- 8月21日 - 31日
ドイツ・フランス下見旅行（大村恵美子）
- 12月13日 第103回定期演奏会（杉並公会堂）

成人式と初練習

八巻 香代子

私には4人の子供がいます。このたび3女が成人式を迎えました。

早朝から支度をして式場へと送り届けます。その後に、ちょっとした楽しみがあります。その年々で晴れ着にはカラー系統があり、長女のときはピンク、次女のときは黄色、そして今年は暗赤色と、娘たちの成人の様子を色で思い浮かべていることです。ちなみに、娘たちは私の着た振袖(朱色)を着てくれました。私にとっては感慨深く嬉しいことです。4人目は待望の息子で17歳です。まだまだ子育て真っ最中なのです。

「マタイ受難曲」から参加させていただき、11月の「クリスマス音楽」次回公演にむけての新曲と、私にとってはすべてが初挑戦になります。家事の合間に音取りし、練習会場へと、この先続けていけるのか覚悟するのに時間がかかりました。

今年の初練習の前の新年会パーティに出席させていただきました。健二さんが駅まで来てくださり、先生はお祝いのお菓子で迎えてくださいました。偶然、わが家でも新年には毎年いただくお菓子(花びら餅)で、先生のお心に感じ入りました。ご挨拶、初合唱、歌留多とり・・・、近所のレストランに席を替えて昼食会へと。美味しい食事をしながら、みんなでたわいない会話が盛り上がり、本当に楽しい時間を過ごしました。この日は雨が降り寒かったのですが、心は暖かく、充実した一日になりました。これからも行事には積極的に参加し、大いに楽しみたいと思っています。

(団員：ソプラノ)



ビストロ「オー・ランデヴー」(千歳船橋)での恒例の新年昼食会。
2008年の参加者：左から加藤剛男B, 川合満里子S, 八巻香代子S, 大村恵美子(主宰者), 内本越子S(前), 菅原昌子S(後), 三上裕子A(前), 柳元宏史B(後), 康美洋子A, 中村桂子S, 大村健二T, 菅間五郎Bの各氏。

カンタータ第102番《主の目は 信仰を見たもう》
»Herr, deine Augen sehen nach dem Glauben«
BWV102

第1部

1.合唱

主の目は 信仰を見たもう
主 打てども かれら 痛まず
主 悩ませど おのれ たださず
巖(いわお)のごと 顔も 固く
たち帰るを 拒む

(エレミヤ5:3)

2.レチタティーヴォ(バス)

刻まれたる 似姿 いずこ
主に 逆らいて 倒るる とき .
主の み言葉 いずこ
おのれ 正す 心 失い .
主は われらを 尋ね いさめて
迷いより 戻さんと すれども
固き 思い 去らば
心の 闇を のがれ得じ

3.アリア(アルト)

嘆かわし
痛みを 忘れし 魂(たま)よ
悪しきを 重ねて
閉ざせる 道 ひた走り
恵みより
みずから 離れ去る

4.アリオージョ(バス)

なんじ 蔑(なみ)するや
慈しみと 赦しの みこころを
知らずや 悔い改めを 主は 待てり
されど 固く 悔いざる なが 心は
主の 怒りを 積み上ぐるのみ
審きの 日に きびしき 裁きは あらわと ならん

(ロマ書2:4-5,16)

第2部

5.アリア(テノール)

恐れよ
安きに まどろむ 魂(たま)よ
おもえ いかばかりならんや
罪の くびきの 値(あた)いは
主の 赦しも 足どり 重く
み怒り さらに きびしからん

6.レチタティーヴォ(アルト)

待つべからず

時を失わん。
はや 恵みに 替え
審きの 座に 引きゆかれん。
悔ゆるも 遅し、時間(とき)と 永遠(とわ)の
境にあり 身と 霊(たま) 裂かる
盲(めしい)たる 心よ 帰り
このときにも 目覚め 備えよ

7.コラール

今日にも たち帰れ
あす 知れず あれば
今日 健やかなの 身も
あす 病み 死すべし
悔いずて 去りなば
霊(たま)は 灼かるべし

(Johann Heermann „So wahr ich lebe, spricht dein Gott“1630 第6節)

イエス 助けたまえ
今日にも 召したまえ
悔い改め 終えて
死に 備えしめよ
今日にも いつにても
故郷(ふるさと)を 目ざさん

(Johann Heermann 同上 第7節)

解説

1726年8月25日、三位一体節後第10日曜日に初演されたカンタータ。編成は、アルト、テノール、バス独唱と4部合唱。フルート1、オーボエ2、弦と通奏低音。

ライブツィヒのカントルとなって第3年目、この年の前半にバッハは、親戚にあたる、マイニンゲン^{*)}の宮廷楽長ヨーハン・ルートヴィヒ・バッハ(1677-1731)のカンタータを18曲演奏して務めを果たした。後半になると、ルードルシュタット^{**)}で1726年(当カンタータ初演の年)に出版された歌詞集(作詞者名不詳)によって7曲(他にBWV17, 39, 43, 45, 88, 187)づくり、いずれも前半のヨーハン・ルートヴィヒと共通した様式をとっている。つまり、2部分構成で、各部の冒頭を聖句からの引用(第1部には旧約、第2部には新約)で始める。

[^{*)},^{**)} いずれもチューリングゲン南部の小都市]

このBWV102では、それに準じてはいるが、第2部冒頭に新約からの引用を置くかわりに、一足早く、それを第1部の終りにおいた。前半の内容が、きびしい悔い改めの要求であるため、説教の始まるのを待たずに、神の慈しみに思いをいたすよう、急いでバス・アリオゾをもって促したかったのだろう。

第1曲(旧約聖書：エレミヤ5:3)

主よ、あなたの目は、
真実を顧みられるではありませんか。
(現行聖書は日独とも「真実」Wahrhaftigkeit、ル

ター訳聖書=歌詞では「信仰」Glauben)
あなたが彼らを打たれても、痛みを覚えず、
彼らを滅ぼされても、懲らしめを受けることを拒み、
その顔を岩よりも堅くして、
悔い改めることを拒みました。

第4曲(新約聖書：ローマ2:4-5,16)

神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。

(…)

これらのことは、(…)さばかれるその日に、明らかにされるであろう。

第1部

1) 合唱

長い前奏から冒頭合唱が始まる。この楽曲をはじめ、当カンタータの全7曲中3曲が、後年、2つの小ミサ曲に転用された。

第1曲(合唱)

BWV235《ミサ曲ト短調》キリエ(合唱)

第3曲(アリア, A独唱)

BWV233《ミサ曲ヘ長調》クィ・トリス(S独唱)

第5曲(アリア, T独唱)

BWV233《ミサ曲ヘ長調》クオニウム(A独唱)

この日の聖書章句は、イエルサレムの墮落を前にした預言者エレミヤの警告(エレミヤ7:1-11)、それをうけてのイエスの歎きと滅亡の予告「いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残しておかない日が来るであろう」(ルカ19:43,44)。

主 打てども のスタッカート、巖のごと顔も固くの頑固なモチーフ、不安定な不協和音程進行など、人間の性格描写が生々しい。

2) バス・レチタティーヴォ

神の似姿であるべき人間の心にわだかまる闇。

3) アルト・アリア

オーボエ・オブリガートで、アダージョの嘆き。

4) バス・アリア

弦合奏、ヴィヴァーチェの、心を引き立てる4分の3拍子のアリアは、神の慈しみのまえにもいまだ逡巡する不安定な信仰を描く。

第2部

5) テノール・アリア

フルートの速いパッセージで駆り立てられる、テノールの叱咤の声 恐れよ 安きにまどろむ魂よ。審きのきび

しさをはげしくわが身に警告する。

6) アルト・レチタティーヴォ

オーボエ2本で時を刻みながら、待ったなしの悔い改めへと導く。

7) コラール

1節 今日にも立ち返れ、2節 今日にも召したまえと、イエスに切なる願いを訴える。今日にもいつにても故郷を目ざさん。

偽りにみち、滅びに瀕した21世紀の地球からも、救いは遠く、神のみこころは測りがたい。たいへん激しい叱責のカウンタータであるが、今にしてこの音楽のわれわれにつきつけるメッセージに、心を閉ざすか開くかが、人類の前途の分かれ目となるのであろう。

2009年 ドイツ・フランス演奏旅行

大村 恵美子

第5回ドイツ・フランス演奏旅行は、下記日程での概要を組みつつあります。

2009年8月7日(金) - 8月16日(日)

過去4回(1983年、88年、93年、97年)と同様、10日ほどの旅程を考えると、希望時期と旅行代金との兼ね合いで、さまざまな意見があると思われます。また、一昔前とは異なり、勤め人の方々の休暇の取り方などにも変化が見られるのではないかと予測されました。

そこで、昨年秋から年末にかけて、アンケートによって団員の皆さんの希望時期をはかりましたところ、ほぼ年間のすべての時期にわたって、ばらばらの希望が出され、団員の皆さんの生活相の多様さを認識させられたわけですが、会社勤めの団員の参加の可能性に配慮すると、8月のお盆休暇の前後に設定せざるをえないという結果になりました。

現在のところ、およその旅程は、つぎのように計画されています。

2009年

8月7日	成田発、機内泊
8月8日	フランクフルト着、泊
8月9日	フライブルク着、2泊(日曜日)
8月10日	フライブルク
8月11日	コルマール経由ストラズブル着、泊
8月12日	シュトゥットガルト着、3泊
8月13日	シュトゥットガルト
8月14日	シュトゥットガルト
8月15日	ローテンブルク経由ハイデルベルク泊
8月16日	フランクフルト発 - 成田着(日曜日)

ご覧いただけるように、このたびはシュトゥットガルトでの滞在が核になっています。

今回の演奏旅行のそもそもの発端は、第1回目の演奏旅行以来、ドイツでの受け入れの中心にいてくださったアンメ牧師の、日本側での連絡窓口役をつとめてくださった南吉衛牧師が、昨年4月より、シュトゥットガルトを州都とするヴェルテンベルク州教会の「世界宣教・エキュメニカル運動、発展途上国教会援助部門」(Dienst für Mission, Oekumene, Entwicklung)の担当者として招聘されており、シュトゥットガルト赴任中に、ぜひとも合唱団の演奏会を実現させたいという、南牧師の熱いご要望に始まります。

シュトゥットガルトといえば、ヘルムート・リリング氏率いるゲヒンガー・カントライとバッハアカデミーのお膝もとです。1983年の第1回旅行では、リリング氏のご依頼で、バッハアカデミーのプログラムの中で、私たちがモテットを歌うことができました。その後の様子から分からないので、南先生に現状を教えてくださいようお願いしていたところ、1月22日、ドイツから南先生が電話をしてこられて、ちょうどこの日、バッハアカデミーの事務局に行かれたところ、ばったりと階段でリリング氏ご本人と出会われたそうです。私たちのことをよく覚えていらしたそうです。相変わらずご多忙のようなので、私はさっそく手紙の原稿を書いて、来年は南先生側のプランに沿ってシュトゥットガルトに行きますが、リリング氏とその合唱団の催しがあれば、聴衆として参加したい、かつてのように、コラール1曲でも一緒に歌う機会があったら、短い時間でもお会いしてご挨拶したい、とお伝えするよう、南先生にお願いしました。

もう一つの目玉は、去年の6月、松山で橋本眞行氏にお引き合わせいただいた、フライブルク・バッハ合唱団のポイアーレ氏および団員の方々との再会です。ここで何が実現可能か、まだ未知数ですが、日曜をふくんだ丸2日間を、この古都フライブルクにとってありますので、何らかの形で有意義な再会ができるよう、これからポイアーレ先生とも連絡をとってみようと思っています。シュヴァルツヴァルト(“黒森”丘陵地帯)にすぐ入ってゆける美しい小都市で、ここも、私が昔ストラズブルにいた間、服部幸三先生が住んでいらして、ときどき日帰りで訪問しては、バッハ合唱団立ち上げの夢を聞いていただいた、思い出の地です。

2009年の旅は、ローテンブルクやハイデルベルクもふくめ、今までよりも、いちだんと楽しみの多い内容となりそうです。各地でのコンサートや観光その他の活動内容、旅行代金等、詳細は未定ですが、今夏の下見旅行を終えて決定する予定です。このツアーには、若干名の一般同行者も募ることになると思います。後援会・団友の方々、月報ご愛読の方々のなかで、合唱に参加したい方、同行して鑑賞と観光をともになさりたい方がいらっしゃいましたら、お申し出ください。詳細が決まり次第、逐一お知らせをしてゆく予定です。